

御詠歌と舞囃子の夕べ

令和五年九月一日

演目紹介

◆高砂へたかさこ

阿蘇宮の神主友成は旅の途中高砂の浦で、松の木陰を清める老夫婦に相生の松の謂れを尋ねた。老夫婦は自分達こそ相生の松の精だと明かし姿を消した。友成が住吉に行くに住吉明神が現れ颯爽と舞を舞い千秋万歳を祝うのであった

◆草紙洗小町へそうしあらいこまち

歌合せに小野小町と対戦することになった大友黒主は小町の家に忍び入り歌を盗み聞いて万葉の草紙に書き入れこれを証拠に古歌と訴える。小町は後の書入れと見破り勅許を得て草紙を洗い潔白を証明する。すべてが露見した黒主は自害しようとするが小町はそれを取りなして祝言の舞を舞う

◆松虫へまつむし

津の国阿倍野で酒を売る男は、客の一人から昔この原で一人の友が松虫の鳴く音にひかれ草の中に入ったまま帰らず、もう一人の友もあとを追って自害した話を聞く。酒を売るが回向すると、かの亡霊が現れ友を語るのだった

◆高野物狂へこうやものぐるい

主君の遺言でその子春満を育てる高師四郎、ある日だまって出家してしまった春満を追って旅に出る。紀州高野山中で修行する春満との再会を果たし、自分自身も出家して仏に仕える身となる。

数少ない男物狂の名曲

◆神楽へかぐら

舞の種類のひとつ。女神または巫女などが幣を持って舞う気品たかく雅やかな舞

◆半蔀へはしとみ

京都、北山の雲林院に住む僧が、ひと夏かけた安居（あんご）の修行を全うする頃、夕暮れ時に女がひとり現れ、一本の白い花を供えた。僧が女の名を尋ねると、その女は、名乗らず、花の中に消えてしまった。

僧は、先刻の言葉を頼りに五条あたりを訪ねると、昔のままの佇まいで半蔀に夕顔が咲く寂しげな家があり、菩提を弔おうとすると、半蔀を上げて夕顔の霊が現れた。夕顔の霊は、光源氏との恋の思い出を語り、舞を舞い、僧に重ねて弔いを頼み、夜が明けきらないうちにと半蔀の中へ戻っていた。そのすべては、僧の夢のうちの出来事であった。

◆玉葛へたまかづら

旅の僧（ワキ）が長谷寺近くの初瀬川で、小舟に乗る一人の女（前シテ）に出会う。二人は長谷寺に参詣する。女は『源氏物語』に登場する玉鬘の憐れな運命を語って聞かせ、実は自分こそ玉鬘の幽霊なのだと明かすと、姿を消してしまった。

夜、僧の夢中に玉鬘の霊（後シテ）が在りし日の姿で現れ、仏にすがる心と恋の妄執との間の葛藤を述べる。湧き起こる情念に苦しみ苛まれる玉鬘であったが、過去の罪障を懺悔し、遂に解脱を遂げる

◆葵上へあおいのうえ

光源氏の正妻葵上に対して六条の御息女が嫉妬のあまり生霊となり北の方を苦しめて重体に陥らせるが、仏力法力の前に敗れ救われる

◆野宮へのみや

嵯峨野の野宮の旧跡で、旅僧に光源氏と六条の御息所（みやすどころ）の悲しい別れを物語った女は実は御息所の化身だった。回向する僧の前に御息所の霊が昔の姿で現れ、葵上との車争いの屈辱の思い出などを語り、懐旧の思いに浸りながら舞う

◆八島へやしま

旅の僧が八島で老若二人の漁師に出会う。老翁は源平合戦の模様を語り自分が義経の身であると仄めかして消え去る。その夜僧の夢に義経の亡霊が現れ修羅道の苦患を現す。臨場感あふれる軍物語が魅力の修羅能の大作

◆田村へたむら

清水寺に詣でた僧は、満開の桜の下、庭掃きの童子に寺の縁起を聞き、付近の名所を教えてもらう。田村堂に消えた童子は、その夜、読経をする僧の前に坂上田村丸となって現れ、鈴鹿山の鬼退治の有様を物語る

◆狸々へしんじょう

唐土楊子の市で酒を売る高風のもとに、いつも来て酒を飲むものに名を尋ねると、海中に住む狸々と答えた。高風が潯陽（しんじょう）の江に、酒壺をかまえて待っていると狸々が現れ舞を舞い、汲めども尽きぬ酒の泉を与えて去って行く

◆清経へきよつね

平清経は豊前の国柳が浦にて入水自殺してしまったので、身内の淡津の三郎は形見を持って清経の妻を訪ね、その死を報告する。その夜の妻の夢に清経が在りし日の姿で現れ、自分の死に至るまでの物語を語る